

# 細菌戦と現代

第3号 03.11.20

『エクスポージャー』は1999年のドイツ映画。ビデオソフトはアルバトロス（株）の販売。

ドイツのケルンで、インフルエンザによる死者が発生し始めた。そのインフルエンザは、強毒のスペイン風邪であった。

1918～19年のスペイン風邪は、罹患者が全世界で6億、死者2300万という。日本でも、罹患者2300万（当時の人口は5700万）、死者38万余。日本の流行は、1918年夏、同年秋、1919年春にピークがある。第一波の患者は1923万9226人、死亡率1.06%、第二波の患者は170万8507人、死亡率2.42%、第三波は患者数195万6812人、死亡率4.75%と、死亡率がだんだんと上昇している。（『かぜ・ウイルス・人』加地正郎著 西日本新聞社）

スペイン風邪が、猛威をふるったのは、ウイルス感染の仕組みが普通のインフルエンザとまったく異なっており、ウイルスが呼吸器

だけではなく、全身に感染することが可能のためらしい。（朝日新聞 1998・8・19）

北極海に浮かぶノルウェーのスピッツベルゲン島の永久凍土の中に、スペイン風邪で死亡した7人の遺体が眠る。これを、カナダなどの国際調査チームが発掘するという。（埼玉新聞 1998・5・20） 映画は、これをネタにしている。



12月4日(木) 731部隊細菌戦裁判 控訴審第3回 午後2時～3時

東京高裁101号法廷 終了後報告集会 弁護士会館1005号室

# 1940年農安・新京のペスト流行の謎（補遺）

陸軍軍醫學校防疫研究報告  
第2部 第515號

昭和15年農安及新京ニ發生セル「ペスト」  
流行ニ就テ  
第1編 流行ノ疫學的觀察(其ノ2)  
新京ノ流行ニ就テ

陸軍軍醫學校軍醫防疫學教室(主任 増田 火佐)  
陸軍軍醫少佐 高橋 正 彦



第 2 部
原 著
分 類 441—2 333—41
受附 昭和 18. 4. 12

高橋正彦論文（国会図書館蔵、慶応大学図書館に在る物と同じ物）の『昭和15年流行農安及新京ニ發生セル「ペスト」流行ニ就テ 第1編 流行ノ疫學的觀察（其ノ2） 新京ノ流行ニ就テ』の「総括」によれば、「今次流行ノ病毒搬入経路ハ不明デアツタガ、種々ノ点ヨリ考察シテミルニ、農安方面ヨリ田島犬猫病院（三角地帯内ニアル）ニ受診ニ來た牛、馬ノ荷物ニ付着シテ運搬サレタ有菌蚤ガ同病院ノ鼠属間ニ侵入シテ流行ヲ惹起シ、次デ、三角地帯ノ鼠ペストノ流行ヲ起シ、其ガ人ペストノ直接ノ伝染源トナツタモノト考ヘラレル」としている。即ち、先に、ネズミがペストに罹り、それが人に伝染したと言っている。

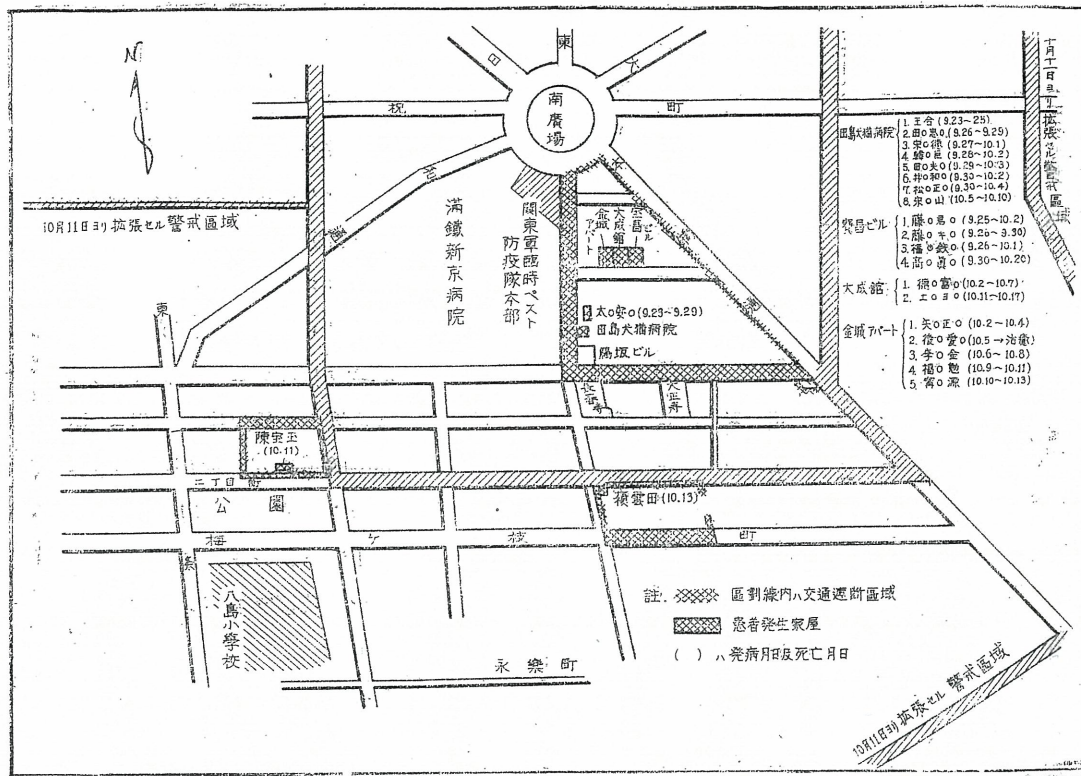
その根拠として、第30表の「人ペスト發生前ノ三角地帯内ニ於ケル斃鼠ノ調査成績（長花）」に、9月17日～22日の間の、住民によ

第30表 「人ペスト」發生前ノ三角地帯内ニ於ケル斃鼠ノ調査成績(長花)

發見月日	發 見 場 所	斃 鼠 數	發 見 者
9.17	東三條通(犬猫病院附近) 森義雄宅ノ裏	4	森 義 雄
20	同 上 脇坂アパート5號宅内	1	高松チトセ
20	同 上 臺 所	1	同 上
20	同 上 (犬猫病院附近) 湊晴夫宅ノ門附近	1	湊 晴 夫
22	室町4丁目 東京庵(そば屋)倉庫中	2	土 屋 ヨ シ
22	同上家ノ前ノ道路上ニテヒヨロヒヨロセル鼠ヲ發見	1	同 上
22	室町4丁目(大成館裏)飯田宅玄關外	1	飯 田 ハ ル エ
22	同 上 玄關内	2	同 上
9.17~9.22	計	13	

る死んだネズミ13匹の目撃証言を掲げている。これにより、「斃鼠ノ多クツタコトハ確實デアルカラ」としているが、6日間で13匹が「多い」のだろうか。また、「牛、馬の荷物」とは何か、物産であれば他の場所で捌いてから、田島犬猫病院に受診に来るだろう。何か腑に落ちない。

第3圖 「ペスト患者発生要圖」



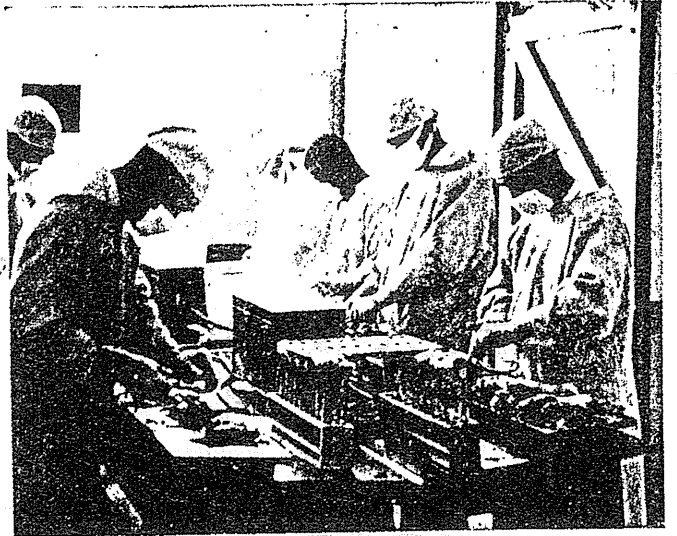
『昭和15年流行農安及新京ニ発生セル「ペスト」流行ニ就テ 第5編 流行ニ於ケル防疫実施ノ概況』によれば、「防疫隊本部ニハ始めノ期間ハ満州電業会社ノ管理局ヲ使用シ、其ノ後ハ国防会館ヲ使用シタ」とある。満州電業会社は上図の、南広場の南側にある。その東側が、いわゆる「三角地帯」。



元国防会館（2001年） 当時の大同大街にある



◀ 鏡見作業の一部



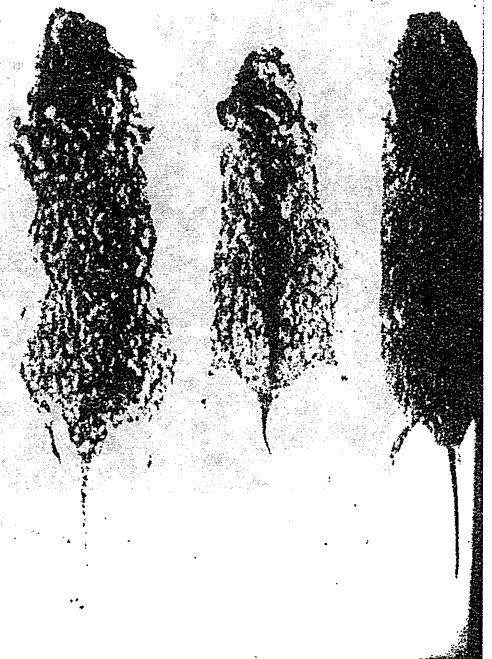
標本を作製す。

▷ [蚤の種類決定] 蚤は鼠族別に蒐集し厳密に其種類を決定す。

▽ 熱沈降反応作業の一部



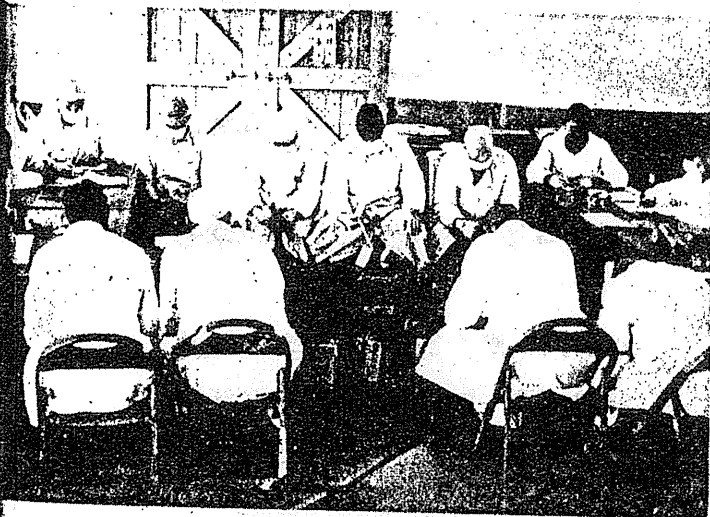
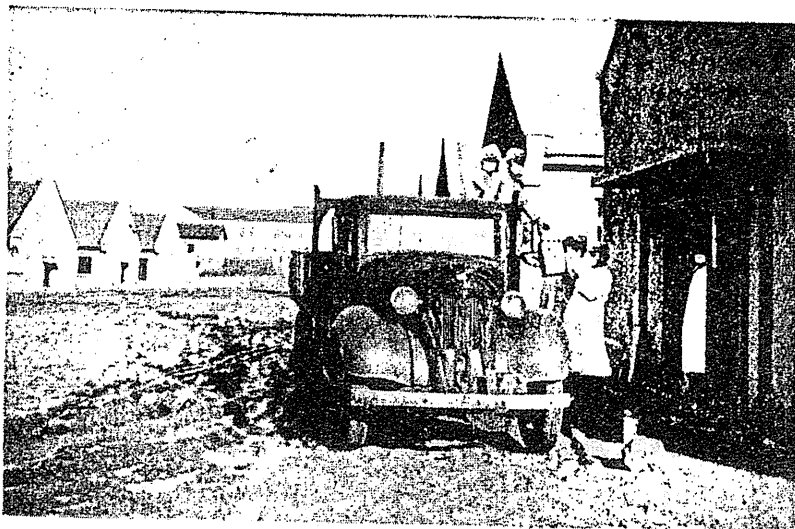
▷ 染色作業の一部



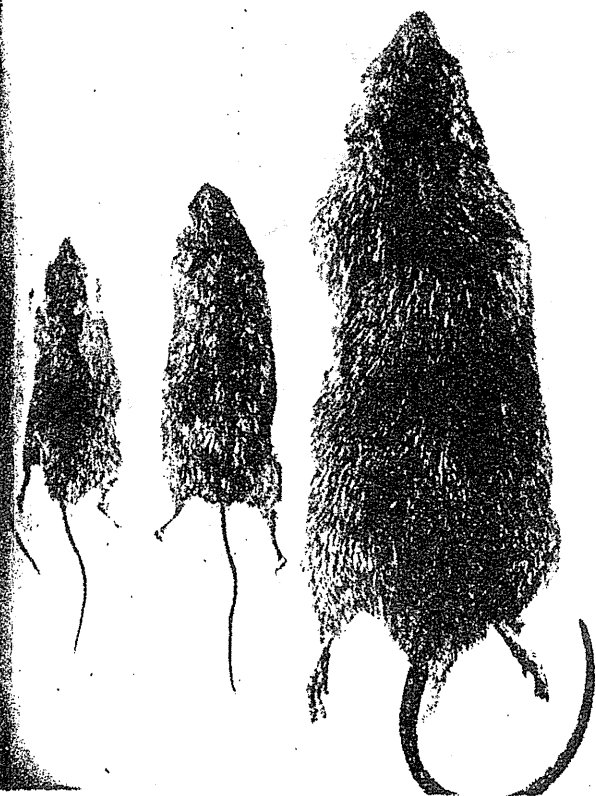
新京に於ける

ペスト防疫作業

昨年即ち康徳七年新滿洲國  
建國以來初めて國都新京にペ  
スト發生し世人を驚愕せしめ  
た。同市衛生當局が九月末日市  
内にペスト患者と思はるゝも  
の、發生を聞き知るや、急遽  
對策會議を開き防疫本部を設  
置する一方檢索の結果眞性ペ  
スト患者の發生確認され、次  
で關東軍臨時ペスト防疫隊本  
部設置となり、極めて大規模  
の徹底的防疫を行つた結果、  
さしもの悪疫も遂に終熄し、  
同年十二月末日に一般防疫作  
業は終結したのである。  
寫眞は當時主として衛生技  
術廠を中心とする防疫檢索作  
業の情況である。(綜説欄阿部  
廠長の新京に於けるペストに



防疫作業中新京市民の捕獲せる鼠族の種類右よりドブネズミ、セスヂネズミ、アヂアハツカネズミ、カヤネズミ、ヨシハタネズミ、セスヂキヌゲネズミ、キヌゲネズミ。

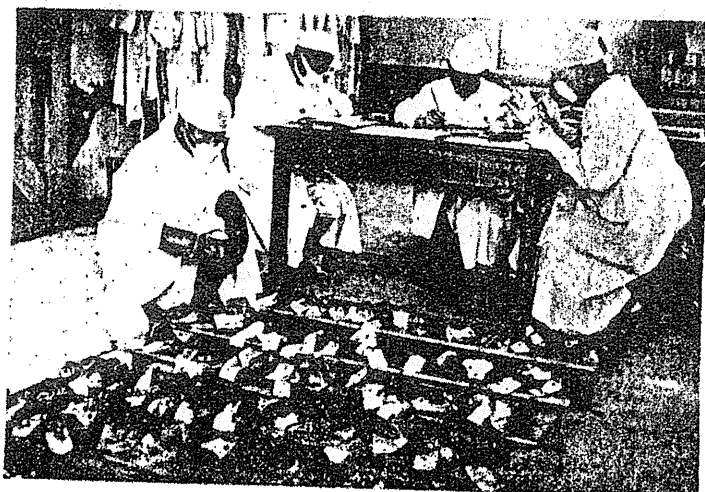


↑ [鼠體搬入]殺鼠の上紙包になせる鼠體を最寄の警察派出所に提出せしめ、集りたる鼠體を派出所記名の罐に入れて衛生技廠に搬入。

← [鼠體整理]搬入せられた鼠體は一夜麻醉薬に收容して殺蚤處置をなしたる後、蒐蚤に先立ちて其種族に從つて整理す。



↑ 蒐蚤作業の一部



↑ 一列十五鼠體を解剖板に固定す。

“アメリカ軍の複葉機のボウツと白くなる煙で、4～5日後、村の  
住民が死んだ” “感染者は、ペガ山などに移動、伝染が拡散した”

「無等山細菌戦」を告発するチョン・ウニョン氏が語る、当時の状況  
渓谷の水を飲んだ老人と子供、全身が真っ黒に

#### 当時の被害者、何名かは今も生存

「1951年初秋、ファスン郡イソ面ヨンヒョン里(当時トンドゥン村)のバルチザン等が活動していた無等山の裾野の渓谷で、昼間、アメリカ軍の軽飛行機である複葉機が飛来、バルチザン等の自首を促すヒラをまきました。続いて、複葉機は、何回か付近を旋回した後、再度ペガ山へ向いました。しばらくして、また軽飛行機が飛んできて、後から、煙のような物を、しばらくの間流していきました。」

チョン・ウニョン氏を始めとするバルチザンは、この飛行機が墜落すると思ったが、何の異常もなく、飛んでいったと主張した。

チョン氏等は、「それ以後、3日ほど過ぎた後、この一帯の渓谷の水を飲んだ子供や老人、バルチザン等が高熱を出し、下痢、嘔吐などの症状が出た。特に、全身が真っ黒になり、気力が無い状態で、一人ずつ死んでいった」。そして「このような病気が、腸チフスの一種である<回帰熱>であることが、後でやっと分かった」と明らかにした。

チョン氏は、細菌弾がばらまかれた4～5日後、回帰熱にかかった人々が、井戸端で死んでいる時、討伐隊等が、罪のない人々とバルチザンに、無差別に銃を撃ちまくったと言った。チョン氏は、特に、回帰熱にかかった人々が、近隣のペガ山や別の場所へ移動し、伝染を加速させ、ここはアメリカ軍がばらまいた細菌戦の最初の初発地だと主張した。

チョン氏は、当時バルチザン活動を一緒にやっていた人の中に、回帰熱にかかった後、現在、生存している人も、ファスン郡等に何名がいると明らかにした。

1951年1月に、トンドゥン村に入って来たチョン氏は、ホンジョンヒという名前で、3年余り、そこでバルチザン活動をしてい時に、捕らえられ、一番で死刑判決を受け、12年間服役した。

<回帰熱とは >

スピロヘータが、体内に侵入し、発熱する伝染病の一つ。ダニやシラミ、蚊、ノミなどが媒介し、吸血された時、皮膚の咬み傷をとおして、体内に侵入してくる。5～15日間の潜伏期を経て、突然、悪寒・頭痛・高熱・筋肉痛・関節痛の症状が現れ、ひどい場合、昏睡、しびれ、神経症状を呈し、2～10%が死亡する。韓国には、1940年代に、毎年、数百名以上の患者が発生し、朝鮮戦争当時には、もっと多い患者が発生したことがある。以後、患者発生報告はない。

戦争遺跡



中国の黒河 ロシアとの国境の街 元特務機関の建物



黒河の南西の北門鎮 第7国境守備隊の跡 「烟突・煖爐位置」の文字が残る

**9月30日**、細菌戦裁判東京高裁第2回公判が行われました。浙江省衢州・義烏から原告や遺族が来日し、2名が家族の被害と高裁に対する気持ちを意見陳述しました。裁判終了後デモ行進、報告集会では、土屋弁護団長の解説後、学習会をもちました。

学習会は、「浙贛作戦—細菌戦・毒ガス戦」の題で、講師は明治大学大学院生の松野誠也氏です。特に、1942年に細菌戦の行われた、浙贛作戦そのものが、どういう作戦だったのかを詳しく話していただきました。浙贛作戦は、飛行場破壊作戦であり、燼滅作戦であり、物資略奪作戦であったため、街や村を破壊し焼き払いました。そこに、実戦での細菌戦実験がおこなわれ、多くの被害者を出しました。第13軍司令官澤田茂中將は、細菌戦は「日支関係に百年の痕を残す」「山中、田舎の百姓を犠牲にして何の益あらん」と反対したこと、しかし、毒ガス戦に関しては何も問題にしていなかったとのことです。

**10月1日**は、政府との意見交換会でしたが、出席は防衛庁だけでした。厚労省と外務省は出席しませんでした。前回の意見交換会の後、かねてから、吉見法政大学教授が公開を要求していた『流行性出血熱の本態に関する実験的研究 陸軍々医少佐 池田苗夫』が公開されました。また、『衛生学校記事』の発行者は私的サークルなので、保存されていないとの回答だが、「陸幕認第8号」となっているとの指摘に、再度調査するということになりました。

## 「細菌戦と現代」購読のお願い

細菌戦裁判、731部隊、細菌戦、現代の生物戦、本の紹介、資料の紹介、などを掲載します。

購読料 2000円 年5回発行

## パネル貸し出し「731部隊の細菌戦」

細菌戦の事実を知ってもらうために、パネルを作りました。内容は、731部隊とは、衢州細菌戦、寧波細菌戦、常德細菌戦、浙贛作戦細菌戦、恐ろしい伝播、裁かれる細菌戦の7項目です。細菌戦裁判支援のために、各地で、パネル展示会を開いてください。

ラミネート加工 A2 70枚 A3 2枚

貸し出し料 7日間 1万円 送料 実費 宅急便で送れます。

## 転居しました 新住所は

〒343-0832 埼玉県越谷市南町 1-7-5 奈須方

731・細菌戦裁判キャンペーン委員会 TEL・FAX 048・985・5082

郵便振替口座 00110-4-86543 731・細菌戦裁判キャンペーン委員会